

「笹川杯全国大学日本知識大会・作文コンクール 2017」日本招聘 訪日感想文



目 次

★「笹川杯全国大学日本知識大会」訪日団

上海交通大学図書館 職員 陳 琛	3
重慶三峡学院 陳 資政	4
重慶三峡学院 李 曉霞	5
重慶三峡学院 李 思潔	6
大連大学 雷 景堯	6
大連大学 李 嘉嘉	7
大連大学 鐘 一棚	8
上海交通大学 王 若平	9
上海交通大学 吳 文君	10
上海交通大学 孫 亦雲	11
四川外国語大学 黃 一倫	12
四川外国語大学 劉 曄	12
四川外国語大学 李 文	13
東華理工大学 童 華軍	14
中南財經政法大學 陳 馨雷	15
天津外国語大学 周 姍姍	16
華東政法大學 姚 子茜	18
華中科技大學 許 逸菲	18
吉林華橋外国語學院 肖 姍夢	19

★「“本を味わい日本を知る” 作文コンクール」訪日団

華東師範大學施 柯泌	20
上海交通大学 邱 舒怡	21
北京大学 崔 言	22
東北大學秦皇島分校 劉 穎慧	23

★「笹川杯作文コンクール」訪日団

東北大學秦皇島分校 黃 俊捷	24
青島大學 潘 東晨	25
海南師範大學 柏 毅洋	25
華東師範大學 湯 依姮	26

★「笹川杯全国大学日本知識大会」訪日団

※原文が日本語の感想文についてはそのまま、原文は中国語の感想文については、訪日団員等（周姍姍さん、潘東晨さん、孔曉霞さん）の協力により和訳しました。

上海交通大学図書館 陳 琛



ある出会いの名は大切だという。

ある思いでの名はとこしえという。

八日間の旅は長いようで、短いようだったが出会いから別れまでにちょうどいい時間だったかもしれない。

「“本を味わい日本を知る” 作文コンクール」を担当して2年、千人以上の学生が本を読むことで日本のことを知った。コンクールの受賞者と私に日本を体験する機会を与えてくれた日本財団、日本科学協会に感謝する。

今回の旅は「見える」旅だった。東京から沖縄、京都、大阪、行く先々で室町時代の龍安寺の「雅」、江戸時代浅草寺あたりの風土人情、近現代国会議事堂の荘厳と文明、スカイツリーのモダンと活気、戦争が国民にもたらした心の傷…、短い数日間だったが日本の千年の歴史と触れあうことができたと同時に東京の速度、京都の古典、琉球の華麗を体験し、千面の日本が見えた。

今回の旅はぶつかり合いの旅だった。両国の友好は青年にあり。両国の若者は今回の交流を通じて思想のぶつかり合いがあり、若者同士の異文化対話が実現できた。小さいことの体験談、たとえば、食文化、自分のある体験、最近の科学技術体験等、語り合い、日中両国の未来発展の活力となった。「一花一葉一世界」、千百年来、両国の文明のぶつかり合いは細かく、若者同士の想像に融けこまれていた。

今回の旅は心の旅だった。「千里の道、足元から」のように自分の内心を知ることは自分を高める道である。千年古刹の禅意から心の静けさを悟ったかもしれない。万家灯火の繁華と文明から生生不息の奮闘精神が生まれたかもしれない。ある交流と話し合いからイノベーションの火花が閃いたかもしれない。いずれにしても全てのものが心の中で波を打てる。自分自身を反省し、多くの試練に耐えていくことができる。

万卷の本を読むだけでなく、万里の道も歩まなければならない。本を味わい、日本を知る。本を読むことで開かれた世界を、自分の足で検証しなければならない。本から得た知識はまだ浅いが、深く知るためには体験を繰り返さなければならない。日中両国の発展は両国の青年が常に外へ出かけ、常にお互いの国を見ることが大砥礪事であると思う。（原文中国語）

重慶三峡学院日本語学科 3 年 陳 資政



今も覚えています。東京に着て初めての日、「日本人は長生きだから、60 歳になってもまだ中年だよ」とガイドさんは言いました。もともとこれはただの冗談だと思いましたが、この 8 日間、職場で一生懸命働くたくさんの高齢者と出会いました。彼らはみんな元気で、年老いたなんて全然見えません。日本人の元気な姿に感心しました。

この旅の三日目に、日本の学生たちと交流会に参加して一緒に東京見物をしました。討論する際には、日本の学生たちの論理的に話す力、ごく短い時間で PPT を完成して発表できる能力に感心しました。

私にとって、一番印象深いことが一つあります。浅草寺では 5 円のコインが要るのに、私はあいにく持っていませんでした。その時、一人の日本の学生さんが貸してくれました。今でも wechat でその子とやりとりしています。その 5 円のコインは私とその子のご縁であり、日本とのご縁であると信じています。

道中ずっと世話してくれた先生たちに感謝しております。先生たちが今回の旅を企画してくれたおかげで、自分で旅行しても見当たらない日本の風景を見せてくれました。例えば、ひめゆり平和祈念館や京都の醸造所、一人の旅行では多分スケジュールに入れないかもしれません。だから、独特の日本を発見しました。それに、飛行機に乗る時もあったので、朝早く起きなければいけなかったのですが、先生たちは私たちよりも早く起きて、朝食も用意してくれました。私は、その一つ一つに心を打たれました。

道中ずっと傍にいた私の友達にも感謝しております。初めての日に出会った時の遠慮深さ、最後の日に空港で別れた時の名残惜しさ、この 8 日間の旅で、私は日本の本当の姿を掴み取っただけでなく、掛け替えのない友情も獲得しました。(原文中国語)

重慶三峡学院日本語学科 3 年 李 曉霞



帰国して早二日経ちました。日本に着いた初日にワクワクしていた気持ち、飛行機に乗るために早起きして疲れたけど、次に行くところを思うとテンションがまた上がったこと、初日に食べたフグ料理、できたばかりの友達と深夜までお酒を飲みながら無駄話をして、ささやかなことでお腹を抱えて大笑いしてしまったこと、飛行機を降りてまたバス、バスを降りてまた飛行機、わずか八日間で東京、沖縄、大阪、京都の 4 か所を訪問しました。一つ一つの記憶が、また目の前に浮かんできました。楽しい時間は、いつもあっという間に過ぎてしまうものです。しかし、日本で過ごしたこの短い八日間はすでに私の心に焼き付いていて、永遠に記憶に留めたものです。

言葉遣いで自分の気持ちを伝えることが苦手な私は、自分の綴った文章が今回の日本旅のすばらしさの半分も表現できないと思います。

にぎやかな大都市東京では、通りに車や人々がひっきりなしに行き交う中、私たちは皇居、国会議事堂を見学しました。街に立ち並ぶ建物には高いものがあれば、相対的に低いものもあります。しかし、こうした高さの違いが存在しても、バラバラに立っている孤独感を感じさせません。私は、見学で日本の建築物の独特な魅力に引き付けられたほか、中日若者討論会と県民交流会で、日本人との交流を通して、日本の魅力をたくさん発見しました。日本人と直接に交流してみれば、言葉の違いは乗り越えられるものだとわかりました。中国人と日本人の間にはたくさんの違いが存在しているものの、共通点もたくさん見出されるのです。私たちは討論テーマをめぐって、自分の国の魅力を相手に伝えました。そして就職や恋愛、勉強、趣味などについて、自分の悩みや未来への憧れをも語り合いました。中国人学生が悩むことは日本人学生も同じく悩んでいるということに気づき、私たちは妙にお互い心や気持ちが通じ合う気がしました。現在の若い世代はゆとり教育を受けたことでやる気が足りないと言われていています。しかし、私はそうは思いません。私たちは平和な国に生まれて、恵まれた環境で育てられて、自分の母国を深く愛するのは当たり前のことです。当然のことながら、いざとなると、私たちも迷わずに、自分の命をかけて母国を守ります。この点は、中国人青年も日本人青年も同じなのです。

会うは別れの始めです。私たちは御縁があって出会い、またすぐに違う道を辿ることになりました。寂しいながら、元の生活に戻っていかなければなりません。古い物語に終止符を打ってなければ、新しい物語は始まるはずはありません。好きなことをしたいなら、ずっと好きなことをしてはいけないと思います。私は必死に涙をこらえて、決して流しません。涙が出ると、目に映る美しい風景は消えてしまいますから。

孤独な雲は無言な空にぽっかりと浮かんで、雨をもたらします。雨の後には虹が出てきます。あの虹が空にかかって、また私と彼方にいるあなたが繋がっていきます。(原文中国語)

重慶三峡学院日本語学科3年 李 思潔



出会いと花火

飛行機に乗って、中国はだんだん遠くなった。窓の外は白雲しか見えない。目を閉じて、日本は近くなる感じがますます強くなった。そういえば、帰る飛行機の中、私もぐっすり眠った。今回の旅はただの夢か。

いつもは恥ずかしがりな私も、今回、素晴らしく友達ができた。毎日朝一緒に朝日を見て、夜になると一緒に飲んで、笑って...

二日目の朝、私達は日本の学生と一緒に「日中再発見」という交流会を参加して、日本と中国の異なるところとか同じところとかを色々話し合った。本当に面白くて、収穫いっぱいだった。日本の学生たちと一緒に交流したら、ああ、日本の若者はそう考えているのだったなあ...と、お互いに理解も深めたでしょう。

日本語を勉強するのは三年目だったが、その「にっぽん」という国がいつ馴染んできたのか私もよくわからないけど、今回こそが日本再発見になった。日本の町はそんなに静かで、綺麗。人々も謙遜で、親切だ。

旅の楽しさはまず人との出会いと思う。出会いは花火みたいなこと、綺麗で、命は短い。消えるのはほんの一瞬だ。縁の起源はそんなに不思議、なぜ昨日は全く知らない人、今日は友達になるのでしょうか。本当に不思議。

いい友達ができたのが今世の幸せだと思う。皆んな一緒に話し合ったり、散歩したり。今回の旅は前の旅よりもっとロマンチックだと思う。さよならの時はいつも辛いけど、いつかまた会うのだろうと思って、心の中で少し悲しさを持って、素晴らしい人達と出会ったの嬉しさをもって。こんな感じはそんなに辛いとは思っていない、将来どこかで会えるという気持ちがあるから... きっと、いつか、また！(原文日本語)

大連大学日本語文化学院 4 年 雷 景堯



胸に刻まれている思い出

【三日東京】

「あなたにとっては、東京はどんな町でしょうか」。

もし自分がそう聞かれたら、今回七日間の訪日交流活動がない限り、「自由」、「国際的」、「便利」などの普通な言葉しか答えられないかもしれません。2016 年の東京ツアーはただ見物の旅としか言えませんでした。あの時は友達とともに浅草寺、東京タワー、スカイツリー、新宿御苑、お台場、ディズニーランドなど、有名な観光地にばっかり行ったり遊んだりしましたが、記憶に残ったのは、ただ毎日すごく混んでいた地下鉄とか巨大な冷たい建物とかしかないです。すなわちあのとき、私が見た東京はただの巨大都市で、「東京」というものの華やかな外殻でした。その本当の核までは、まだ至らなかったのです。

けれど、今回の交流活動のおかげで、東京の「核」というものを実感し、言い換えれば、東京との「絆」を築いてきました。

東京に着いた初日の夜、私は泊まっていたホテルに近いところにある居酒屋に行きました。オーナーさんが、私は中国からの大学生だということを聞いたら、とても親切に話かけてくれて、からあげもただでご馳走してくれました。オーナーさんと話し合っていた途中、この「人情味」と「包容力」こそ東京の「核」ではないかと急に気づきました。後日の東京の大学生との討論にも、日本人大学生ならではの情熱と優しさに感心し、原宿とか竹下通りとかに行ったときも、あそこのカルチャー共存に驚き、新たな東京の姿が感じられました。たぶん、「東京が冷たい」と言う人も大勢いますけれども、「自分らしく生きられる」、「自由に生活できる」、「異なる人や物事が包容できる」ということこそ東京の魅力ではありませんか。

東京がその「核」を持ち続けられれば、きっとこれから私のような人間にも東京ならではの

暖かさを感じさせるのではないでしょう。

【紺碧の沖縄】

一番好きなところは沖縄です。

沖縄は日本に似ていないと思っています。私は那覇空港を出た瞬間、高温多湿の空気が鼻から体に注ぎ込んできました。しかし、嫌な感じではなく、逆に南国ならではのうまいとあたたかさが体中にかこまれ、まるで心地よい繭に寝ているみたい、引きつめられていた気持ちがついにほっとしてきました。

バスでホテルに行ったとき、道の両側にある青々と広がってゆく海の実しさには心が惹かれてしまいました。「なんと美しい海のものかよ」という言葉はずっと胸の中に繰り返して響いていました。壮大で紺碧の海がまるで天との境界線の果てまで伸びていくみたいに、私の視線を奪ってしまいました。いいえ、奪ってくれましたと言うほうが当時の気持ちにふさわしかったのではないのでしょうか。

翌日の朝、私はホテルのビーチでもっと絶賛すべき海を見ました。晴れ渡っていた青空のしたに、紺碧の海が太陽の日差しを全て吸い込んでしまうように、ぴかぴかと光っていました。ビーチに散策して、波が優しく足元に触れてくれたとき、心が完全に目の前にある景色に折れて、大声で叫びたいという気持ちが胸にいっぱい溢れてきました。

七日間は短いですが、この間に見えたこと、感じたことは、もうすでにかげがえのない思い出になって、永遠に胸に刻まれています。

誠に、ありがとうございました。(原文日本語)

大連大学日本語文化学院 4 年 李 嘉嘉



知日之旅～日本初体験

去年、上海交通大学で開催された笹川杯全国大学日本知識大会で団体一等賞を取ったのはまるで夢のようで、今年二月二十八日、私はようやく日本へ出発しました。

成田空港から出ると、やはり人々が言った通り、本当にきれいでした。タクシーでホテルに行く途中で温かいオレンジの東京タワーが見え、中学時代が読んだリリー・フランキーの小説『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』を思い出しながら、その具体的な内容はあまり覚えていませんでしたが、もう一度読みたくなりました。東京の第1夜は、ロマンチックな東京タワーの光とともに過ごしました。

大連より東京のほうが暖かかったのです。二日の朝、皇居外苑を散歩し、その厚い歴史感に感動しました。そして、国会議事堂を見学し、明治維新後の日本の様子を見ました。国会の柱などには化石が多く含まれていることから「化石の宝庫」とも呼ばれ、その化石を探すことが一番面白かったと思いました。

次の日『知りたい魅力 伝えたい魅力 日中再発見』中日若者討論会が行われました。日本側の大学生と一緒に相談し、文化、教育、経済、メディア、観光の五つの面から両国の

魅力をお互いに伝え合いました。今回の討論会を通して、日本を深く了解していったことにより、むしろ私自身が中国人としていかに祖国の美を表現すべきかを改めて考えました。夜、東京の町を歩いて、その日はちょうど上元節なので、同じ月を見、初めてホームシックの気持ちが湧いてきました。

三月三日、無事に沖縄に到着しました。沖縄料理は本当に私の胃に合ったと思いました。首里城の印が可愛くてたまらないのです。雨のため、首里城を全部歩けませんでした。いつか首里城に行きたいと考えます。午後、ひめわり平和祈念館に行き、その場において戦争の残酷がはっきり感じられました。重い思い出から平和の大切さを覚えました。

五日、大雨とともに伏見稲荷大社に参拝に行きました。鮮やかなペンキが剥がれずに、そのまま保存されていることに大変驚きました。雨で千本鳥居が異世界に行ける絆みたい、不思議な雰囲気だと思いました。その日、比叡山延暦寺会館に泊まり、琵琶湖の夜は静かな美を持っていると感じました。

翌日の朝は、座禅初体験でした。一つが姿、二つが呼吸、三つが自身ということを師傅から教えられました。わずか五分ぐらいと思っていたのに、師傅がもう二十分過ぎたと言いき、びっくりしました。自分自身と会えるように座禅が必要なことを学びました。やっと金閣寺を見ました。角度により金閣寺の景色も変化したと思いました。三島由紀夫の名作『金閣寺』を見たくなりました。食事後北野天満宮に行き、桜の咲くのに間に合い、白い桜とバラ色の梅がお互いに映えてますます美しさを増しました。最後に龍安寺の枯山水を見学しました。もし時間があれば、その庭園に静かな午後を過ごしたいと思いました。

三月七日、帰国の飛行機の紙カップに「3.11 私たち 忘れない」「Forever remembered」と書かれて、これは私の目を見た日本最後のシルエットでした。

最後に、いろいろ指導されましたうちの大連大学日本語文化学院の姚先生及び外教の皆様、また日本科学協会の皆様特に成田空港でずっと待っていった宮内様、日本人大学生たち、誠に心から感謝の意を表したいと思います。今回の初体験をはじめ、今後もぜひ中日友好に力を尽くしたいのです。(原文日本語)

大連大学日本語文化学院 4 年 鐘 一棚



中国から日本へ

三月初頭、私は先輩と一緒に大連空港から出発しました。今回は初めての日本旅行ですから、心の中にすごく期待を抱えていました。

まずは東京でした。東京についてのイメージはただアニメから知りました。日本の国土は小さいので、街並みもアニメのように狭いと思いましたが、一度見たら、なんと中国と同じ大きさでした。それに、人がきつと大勢いるというイメージが浮かべていましたが、恐らく雨のせいで、人はなかなか見つかっていませんでした。想像とは随分はずれています。東京だけではなく、沖縄とか、京都とか、他の町も同じでした。でも、日本はただこの一つの姿

を持っているとは限りません。今回行った時、必ず他の様子を見せてもらおうのでしょう。

私は、毎回旅をしているときは、この町の雰囲気を感じます。ほかの人と少しだけ違います、観光地などを行きたくありません。最も好きなのは、普通の街に歩いていて、人々の話を聞いて特有の文化を感じることです。でも、時間のせいで、こういう機会がなかなかありませんでした。銀座での歩きも、周りは中国人ばかりだったから、文化というものは感じられなかったのです。ですから、この後、時間があったら、絶対日本に行ってみたいと思います。

今回の旅に、最も感動させたのは、ある日の小さなことです。あの朝、時間が迫っていたので、朝食は弁当でした。中国人は日本人と違う、朝は暖かい物を食べます。日本で冷たい弁当を食べたら、なんと一日中お腹が痛くてたまりませんでした。宮内さんがこの事を知ったら、この後の朝食は暖かいお茶でも事前に準備していただきました。なんと繊細な日本人なのでしょう。

中国人と日本人は同じ文化の源なのに、同じアジア人なのに、随分異なっています。中国人は賑やかな雰囲気が好き、ほとんどの場合は人と話し合ったり、笑ったりすることが一番いいと思います。でも、日本人は逆です。マナーを大事にして、他の人に迷惑にならないように気を付けています。その故、日本人は見た目に冷たい感じがしています。でも、一旦話しかけたら、日本人の暖かさが感じられます。細かいことも気づき、相手の気持ちを大事にしています。こういう点が大好きです。

歌のセリフで方つけましょう。「さよならなんてないよ」、いずれまた日本に会えるでしょう。その時こそ、日本を心に刻みます。(原文日本語)

上海交通大学日本語学科3年 王 若平



おとぎ話の中では、昔々、人間はみんな、同じ言葉を喋っていた。

僕らが空まで行けないように、神様は様々な言葉を作り、僕達に付けた。

それから、言葉は、僕らが分かち合えるように存在したものではなくなり、僕らを分かち合えないようにした隔たりになり、壁になった。

それから、それぞれ違った文化ができ、国家や宗教が作られた。それから争いがあり、戦争があった。

今になって僕たちは、まだ分かり会えるのか？

「一人の命が散ることは悲劇だが、何千、何万の命ともなれば、それはただの数字に過ぎなくなる。」いつかどこかで読んだ言葉が浮かんできた。

その日のひめゆりの塔は、雨がざあざあ降っていた。

沖縄が世界大戦で被害を受けたことや、「ひめゆりの塔」のことは、本で読んだことはあるが、正直、「なるほど」、というレベルの感じに過ぎなかった。

しかし、記念館の放映室で、体験者が語りかけている映像が流されると、僕はそこに居づらくなった。その光景が目の前に広まっているようだった。胸が苦しくなり、汗が出るほどだった。戦争で死んだ人は、政治家にとっては数字に過ぎないかもしれない。しかし、その時代に生きていた人々にとっては、ひどく深刻な苦難である。感情を持たず論理的に考えても、そんなことをして結局誰が得をするだろう。わからなくなるのだ。

僕の故郷南京市は、戦争で沖縄よりも何十倍もの被害を受けたが、そこにも記念館がある。僕は、入ったらすぐ当時の悲劇を直接体験しているような感じになり、気持ちが非常に暗くなる。高校の時、学校の協定校から一回修学旅行団が訪問してきたことがあり、案内したことがあったが、そこには掌を合わせて祈っている日本の学生の姿もいた。

同じ人間だから。

研究によると、人間は手術や事故などのビデオを見たりすると、自分の頭も「痛い」と反応する。僕らは、お互いの痛みを感じる能力を、生まれつきに持っているのだ。

だからきっと大丈夫だ。神様は僕らが分かり合えないように言葉の鎖を付けたが、僕らが分かり会えるように心の扉を大きく開けた。

言葉でも、文化でも、国家でも宗教でも、そんなのどうでもいいのだ。

同じ24本の遺伝子を持っているから。同じ心を持っているから。

同じ人間だから。(原文日本語)

上海交通大学日本語学科大学院1年 呉 文君



素敵な旅行

1週間の旅行は知らないうちに終わりました。非常に楽しかったと思っておりますので、心から感謝しております。

多くの日本人の学生と交流する機会があることがすごく意義があると思っています。お互いに偏見や誤解が存在しますが、このような交流活動を通じて、お互いに理解を深めることができると思っています。中日の関係を改善するために、中日の若者が努力しなければなりません。最も重要なのはやはりお互いの文化を理解し、お互いの国へ行って自分で観察して考えるということです。

私は二年前に日本で留学したことがありますが、今回は留学したときに行ったこともないところに行け、体験したこともないことを体験できて、すごく楽しかったと思っています。美しい風景を見ることはもちろん、伝統的な日本の文化を体験することも面白かったと思っています。この前も茶道を体験したことがありますが、沖縄の茶道が自分なりの特徴がありまして、大変勉強になりました。そして、坐禅ということを初めて体験して、無我の境地に入って物事の真の姿を求める宗旨を理解しました。さらに、サンゴを植えて、サンゴが海洋に対する重要性が教えられました。

1 週間の旅行を通じて、日本の魅力を再発見しました。中国も様々な魅力があり、多くの日本人の学生が中国に来ていただければ、中国に対する印象を変えることができるかもしれないと思っています。中日のより良い関係を祈っております。

最後に、日本科学協会の皆様と同行した先生たちと学生の皆さんに、感謝の意を申し上げます。ありがとうございました。

以下はアドバイス：

- 1、毎朝の集合時間は早すぎて、毎日寝不足な状態で過ごしてしまいました。毎晩ホテルに帰る時間も遅くて、自由活動の時間が少ないです。初めて日本に来る人にとって、自分で街を歩いたり、自分で店を探して店で食べたり、自分で日本人と話したりする事が不可欠だと思っておりますので、自由活動の時間を増やしていただければいいと思います。
- 2、昼食と夕食の時間が少し遅いと思います。学生さんにお菓子とかを自分で用意してくださいと注意を与えていただければ良いと思っております。(原文日本語)

上海交通大学日本語学科 4 年 孫 亦雲



何回目の日本かわかりませんが、このような大人数で訪日するのは初めてであり、大変楽しみにしていました。まずは東京で何日間過ごしました。その間で日本人大学生と交流会を行い、一緒にお台場を回って友達になりました。そして沖縄に行きました。沖縄は初めてで、とても楽しみにしていました。テレビでしか見たことない風景をいっぱい見ました。沖縄を満喫した後は京都・大阪に向かいました。

ただ、唯一残念だと思ったことは、帰国した翌日に高熱で倒れました。その後 wechat をチェックしましたが、訪日団のうち何名かが病気になったらしいです。自分は四年生で授業も少なく、倒れても学校を何日か休んでも全く大丈夫だと思いますが、団員のほとんどが二、三年生であり、一番忙しい時期だと思われます。新学期早々、授業を休んで訪日団に参加した上に、病んでいながらもすぐ学校に復帰して授業に出なければならないのがものすごく大変ではないかなと思われます。自分にとってはおそらくもう参加する機会がないと思いますが、今後の参加者の気持ちを考えると、来年の訪日団のスケジュールについてもう少しご検討いただけないかと思い、失礼ながらも率直な感想を書かせていただきました。

八日間で色々あったと思いますが、今思い返すと特にこれといった印象的なことはなく、一つ一つの出来事が絵になって、映画のように繰り返されているのです。自分にとって一番新鮮だったのはやはりこのような大人数と一緒に行動することです。普段一人で目的地への道を探すのと違って、みんなとバスに乗って一緒に行くのです。そして、バスの窓から見る風景が、街を歩きながら見るものとまた違います。(原文日本語)



日本での体験

この八日間、交流団の皆さんと一緒に過ごして、本当に良かったです。振り返ってみると、最初の緊張不安から、旅最中の興奮、別れる時の悲しさまで、今度の観光ツアーの素晴らしさが見られます。東京の繁栄ぶり、沖縄の自然の豊かさ、京都の伝統文化の跡、大阪の熱心さ、どの観光地でも、私を吸い込む魅力を持っています。

特に、沖縄の緑の海を伴うサンライズを見たくて、友達三人で、午前四時にホテルから出ました。そして、沖縄を横断して、2 時間かかって東海岸についたが、海霧があいにく濃すぎて、透き通る海しか何も見えなかったでした。しかし、この海水を見るだけで、心が引かれました。私は、沿海に生まれたが、この翡翠のような海を見るのは初めてだ。次の日に、サンゴの大切さとサンゴの植え方を教えてもらいました。沖縄の幻の海を守るのは、サンゴにほかならないのです。帰国したら、きっと学んだことを周りの人にちゃんと伝ええます。そして、珊瑚礁の数は国だけの問題ではない、グローバルな環境問題にも及ぶから、両国の友情のおかげで、珊瑚礁の重要さがもっと多くの人に知られるように、学生の私たちは自分の責任を果たします。

東京学芸大学、慶応義塾大学をはじめ、日本の学生たちもいろいろ工夫して、熱弁溢れる討論会を開きました。彼らのおかげで、日本が初めての私もより早く慣れることができました。浅草の人の群れ、スカイツリーの眺め、沖縄の煌めく浜辺、こどもの国の冒険、日本の皆さんと一緒に経験したものは、ジュエリーのように、この旅を飾ります。討論会の後、みんな WeChat の ID を交換し、ずっとこの友情を続けたいです。

中国には、「この世に終わらない宴席はない」ということわざがあります、日本にも似た言葉「一期一会」があります。別れるから、また会える。人生もこのように進んでいきます。今度皆さんと会うとき、必ずこの八日間の記憶がよみがえって、私たちのストーリーも再開できると信じています。そして、この旅も、私の人生の中、最も輝く 1 ページになるべきです。

最後、日本科学協会、そして、同行した先生たち、ガイドたちに、感謝の意を表したいです。おかげで、自分の肌で日本を感じるのは現実になって、本当にありがとうございました。中日両国の友情が末永く続けるように祈ります。(原文日本語)



日本での体験

この八日間、交流団の皆さんと一緒に過ごして、本当に良かったです。振り返ってみると、最初の緊張不安から、旅最中の興奮、別れる時の悲しさまで、今度の観光ツアーの素晴らしさが見られる。見られます。東京の繁栄ぶり、沖縄の自然の豊か

さ、京都の伝統文化の跡、大阪の熱心さ、どの観光地でも、私を吸い込む魅力を持っています。

特に、沖縄の緑の海を伴うサンライズを見たくて、友達三人で、午前四時にホテルから出た。出ました。そして、沖縄を横断して、2時間かかって東海岸についたが、海霧があいにく濃すぎて、透き通る海しか何も見えなかったでした。しかし、この海水を見るだけで、心が引かれる。引かれたようになりました。私、沿海に生まれたが、この翡翠のような海を見るのは初めてだ。次の日に、サンゴの大切さとサンゴの植え方を勉強した。教えてもらいました。沖縄の幻の海を守るのは、サンゴほかならないのです。帰国したら、きっと学んだことを周りの人にちゃんと伝える。伝えます。そして、珊瑚礁の数は国だけの問題ではない、グローバル環境問題にも及ぶから、両国の友情のおかげで、珊瑚礁の重要さがもっと多くの人に知られるように、学生の私たちは自分の責任を果たします。

東京学芸大学、慶応義塾大学をはじめ、日本の学生たちもいろいろ工夫して、熱弁溢れる討論会を開きました。彼らのおかげで、日本に初めての私がより早くなれます。浅草の人群れ、スカイツリーの眺め、沖縄の煌めく浜辺、こどもの国の冒険、日本の皆さんと一緒に経験したものは、ジュエリーのように、この旅を飾ります。討論会の後、みんな WeChat の ID を交換し、ずっとこの友情を続けたいです。

中国には、「この世に終わらない宴席はない」ということわざがあります、日本にも似る言葉「一期一会」があります。別れるから、また会える。人生もこのように進んでいきます。今度皆さんと会うとき、必ずこの八日間の記憶がよみがえって、私たちのストーリーも再開できると信じています。そして、この旅も、私の人生の中、最も輝く1ページになるべきです。

最後、日本科学協会、そして、同行した先生たち、ガイドたちに、感謝の意を表したいです。のおかげで、自分の肌で日本を感じるのは現実になって、本当にありがとうございました。中日両国の友情が末永く続けるように祈ります。(原文日本語)

四川外国語大学日本語学部3年 李 文



飛行機が離陸して空に飛び込み、上海は私の目の前に少しずつ小さくなっていました。自分が二十年近くに住んでいたこの国としばらく離れると思うと、まるで親と離れるように心の底から強烈な痛みはぐっと襲ってきました。しかし、異国に滞在した八日間で、短かったが、私が当時感じていた辛さより遥かに強い幸福感を得ました。沖縄で私たちは最高の夜を過ごしました。みんなには「幸せのスイッチ」を入れたようで、笑い声が止まりませんでした。湿気の強いのにぴりとした暖かい空気に包まれるこの島の情熱に心が打たれて、みんなは幸せに溢れました。幸せな気持ちが甘く、しょっぱい潮風と混ざって空中に漂って、静かな星空の下に、私たちはふざけたり、未来への憧れを語り合ったりしながら、浜辺を歩きました。あの夜、沖縄の海辺に、私は久しぶりに思い切り

笑いました。あんなに笑えるのは青春時代だけでしょう。私にとって、沖縄で過ごしたあの二日間がきっと最も忘れがたく独特な思い出になるだろうと思います。

私に深い印象を残ったことはもう一つあります。私たちはひめゆり平和祈念資料館に見学した時、戦争の生存者の宮城さんが自分の悲惨な戦争体験を語る映像を見ました。戦争中に先生や友達が爆弾の爆発で自分の目の前に肉片になったと話したところに、私は耳元にすすり泣きが聞こえました。最初は自分の耳を疑ったが、周りに座った子が涙を拭いてたことが確実でした。戦争は悪魔です。戦争がもたらしたのは苦痛だけ、闇の中に生きざるを得ないことに不安を感じる、戦争に対して、中国人と日本人は同じ思いを持っているのです。その瞬間、私は少しでも理解できるようになりました、どうして沖縄の神社の絵馬に「世界平和」の願いがそんなに多く書かれていたのか。

最後になりますが、日本科学協会の先生方々が素晴らしいスケジュールを練ってくれて、私たちの日本の違う都市の風景を満喫し、独特な文化を体験するチャンスを与えてくださったことに心より感謝の意を申し上げたいと思います。自分が訪日団の一員として、皆さんと出会えて本当によかったと思います。また、いつかお会いできる日を心待ちしています。またいつか会えると信じています。(原文中国語)

東華理工大学 日本語学科3年 童 華軍



懐かしい日中若者討論会、懐かしい東京見物

討論会に参加したのは東京に来たからの二日目だった。前からずっと本物の日本を見たい、たくさんの日本人と話したい、日本を知りたいと思っていた。初めての日本旅行とは言え、緊張せずに日本人と交流することが僕にとって第一の務め、一番やりたいことだ。でも意外に日本人は忙しそうで、結構真面目な顔をして、僕は話しかけようとしても恐れてなかなか近寄ることはできなかった。

東京にいた二日目は討論会と都内観光と言うスケジュールになった。僕にとっては観光スケジュールは少しきつくても気楽に済めるが、討論会とか発表するとかは昔からずっと苦手で、増して相手は日本人だと考えると心がドキドキして来た。しかし本番の討論会が始まって、“アイスブレイク”と言うゲームをやって皆の暖かい笑顔を見て、礼儀正しい自己紹介を聞いて、この前心に積んでいた心配がスッカリした。私達のグループは観光について話した。簡単そうに見えるトピックだけど、実は広すぎてポイントが分からなくなったことが多かった。幸い隣の日本人学生が活発に面白い発言をしたり、問題を出したりして、討論は順調に進みました。そして、最後日本式抽選で発表する人を決める時、なんと僕がもう一人の日本人学生が発表することになり、皆から励まされた。頑張るしかないんだと思って、下手だけど、勇気を出して、発表することが出来た。挑戦と言うのはやる前は怖くてやれそうもないで実際にやれば意外に楽しく思う。

討論会は午前中までずっとやっていた。午後は日本人学生に案内されて、東京見物の予定

だった。午後案内してくれた日本人学生は午前の討論会でおなじグループじゃないんだが、すぐ知り合いになって、昼飯のところに向かいて、出発した。皆同じに若者だから、釣り合っていた。でも時々お互いに何を言っているか全然分からなかった時もあった。そんな時は皆笑って済んだ。めし処は思うより遠くて、そして十人グループなので、受け入れられる店を探すのは大変だった。しかしそれはかえって交流のいいチャンスになって、皆といっぱい喋った。昼飯は天井で済んだ。初めての天井なので美味しいと思ったが、どうも私一人だけその天井に気に入ったそうだった。店に着いたまで皆ずっと喋っていて、飯を取る時急に沈黙になって、お互いにまた気まずそうに笑った。当時そんな雰囲気を開いたのは小島さんだった。皆に午後のスケジュールについて意見を聞いた。全員はスカイツリーに登ることに賛成したわけでもないんだが、当時西野さんが丁度ぼんやりしていたようで、後で皆がスカイツリーに行くことに賛成、手を挙げていたのを気づいて、すぐ手を挙げて、あまなり力が入って、倒れそうになったのは可愛かった。スカイツリーに行くには歩いていくのは便利で、途中で写真何枚も撮った。当時も渡辺さんと言う凄い日本人友達がいって写真を取るのが上手で、なんと写真に入った僕達はスカイツリーよりも高く見えた。そしていよいよスカイツリーの上に上って、そこから見た東京は極めく綺麗だった。残念だが富士山は見えなかった。頂上で皆と凄く楽しい時間を過ごした。

日本で過ごした僅かの七日間にこんなにいい経験をして、こんなにいい人と知り合って、良かった。(原文日本語)

中南財經政法大学 陳 馨雷



楽しい時間はいつも速い

日本に八日間行くことができると知った時、嬉しい気持ちはいっぱいでしたけど、不安の気持ちもありました。人生初の外国旅行だし、仲良い知人は一人もなかったから。しかし、成田空港に着いてみんなの顔を見た時、その不安な気持ちが一瞬どこかに消えました。

皆さんは素敵な笑顔で試合の時の話をして、今度の旅行について楽しく語り合っていました。まるで昔から知り合った友が再会したような気持ちでした。ああ、このメンバーならきっと大丈夫って思うようになり、こうやって私の八日間に渡る素晴らしい日本旅行が幕開けしました。

東京、沖縄、京都、大阪。何もかもが新鮮で、全てが楽しかったです。一番印象深かったのはやはり沖縄にいた時でした。あんな綺麗な海を見るのは初めてでした。みんな、海辺で叫んだり、走ったりして、不思議なステップを踏みながら踊った身振り、楽しく爽やかな笑い声。その時、悩みが全部消え去って、ただただ走った笑った単純な自分がいました。みんな一緒に海辺でジャンプの写真を撮る時、タイミングが合わなくて、バタバタした様子も面白かったです。夜、沖縄県民との交流会で、平田久乃さんと出会いました。彼女はとても明

るくて、初対面にも関わらず、楽しく私たちに話しかけてきました。だんだん話に花が咲き、いつの間にか互いの形のない壁が消え、私たちがすっかり仲良くなりました。久乃さんは中国語にとっても興味があり、これ中国語で何というのってとても興味津々に私たちに聞きました。そして、私たちが帰国後でも連絡できるように、一度も使ったことのないウィチャットをダウンロードし、使い始めました。そんな久乃さんを見て本当に感動しました。ありがとうございました。

楽しい時間はいつも速い。別れの日、みんなが空港でお別れの話をして、また会おうねと再会の約束をしました。本当にあっという間でした。来年、また日本に行って皆さんと再会できるといいな。

そして、同行してくれた先生たちにも感謝の意を申し上げます。素敵なチャンスを下さって、ありがとうございました。一緒に付き合ってくれて、親切にしてくれて、本当にありがとうございました。掛け替えの無い最高の八日間でした。

みんな、また会おうね。(原文日本語)

天津外国語大学高級翻訳学院大学院 1 年 周 姍姍



帰国当日、バスで上海浦東国際空港から新幹線駅に向かった途中、疲れてつい寝てしまいました。「虹橋空港に着きました。後のドアから降りてください。」バスで流れた音に起こされた瞬間、自分がバスで東京都内のホテルに向かっていた途中だと錯覚に落ちました。日本に到着した初日の光景がまた目の前に浮かんできました。その日、始めて日本に行った私はあまりにも新鮮で、疲れたが何もかも見逃したくなって、バスで移動中もずっと窓の外を見つめていました。四時間前にはまだ車窓から大阪湾が見えたのに、今は完全に違う風景。心に穴が開いたように、寂しさはぐっと襲ってきました。

一週間は本当に長かったんです。私たちは一週間で東京、沖縄、京都、大阪四つの都市に行って、モダンな大都市から伝統的な古都まで、様々な風景を楽しんだり、茶道や華道、座禅など日本文化を体験したり、日本の学生や各界の方々との交流ができたりして、日本のことを本を読むことだけではなく、実際の体験でより知るようになって、多くの方々と絆を結び、友情を深めることができました。また、出会った日本人大学生に討論会で活発に発言することや上手にスライドを作成し、発表することなど、私は学ぶべきことがたくさんあると痛感しました。しかし、一週間は本当に短かった感じもします。東京では左側通行に対し、大阪では右側通行といった交通ルール、家以外のドアはほとんど自動ドアやほとんどのトイレにトイレットペーパーが付いている、生き生きとして働いているお年寄りが多くいるといった「常識」を日本に来てみないと分からなければ、エレベーターに入ったら自然に他の人のために「開」ボタンを押したりフロアを押したりしてあげるといった日本人の優しさも感じられない、一週間で様々な情報が飛んできました。日本人だけでなく、訪日団の皆さんをも含んで、日本に来てみないと会えない人、または知り合うことさえもできない

人、色々な絆が築かれてきました。振り返ってみると、自分が一番多くしゃべったことは「もっといたい！もっと話したい！」でした。

これから訪日団の皆さんも、日本で出会った日本人の皆さんも、もとの生活に戻すのです。しかし、日本で過ごしたこの一週間は決して私たちの心の中から消えるわけがありません。

いつか日本に行って自分の目で見てみたい、これは私の念願でした。恥ずかしいですが、生まれ育ちは田舎で、大学の専門は何だと聞かれると、いつも大声で「日本語だ」と堂々と言えませんでした。それは「日本人は戦争を肯定する人や中国人が嫌い人が多い」といった決めつけがたくさん存在して、自分は笑われるんじゃないかという不安を抱いていたからです。しかし、うちのお父さんはいつも私を支持し、励ましてくれました。「お互い近隣国だから、相手のことを知るべきだ。日本人には私たちが学ばないといけないことがたくさんある。悪い人ならどの国にもいる、何人で全国民を決めつけるのはただの無知だ。」とよく私に言いました。病気で危篤になった最後の最後まで、勉強した日本語を生かして、日本に行ってほしいと言ってくれました。今回の日本旅で、私自身自身も父の夢もが叶えたとも言えるでしょう。日本人は中国人の私を親切に接してくれたよと私が帰国後、日本に行く前に「日本は危険だ。気をつけて」と言った人にこんなことを伝えました。また、日本科学協会や人民中国の関係者の皆さんのおかげで、今回の旅で、去年天津で初めて出会ったPANDA杯の皆さんに東京で再び会えることができました。こうした人と人との間で築かれた絆にはとても感慨深いんです。「日本人」、「中国人」という一般的なイメージで判断するのではなく、まずは一人として見つめることの大切さが再び感じました。お互いに尊重し、素直な気持ちで話し合えれば、言葉や国境の壁が越えられるものだと思っています。そしてそこから花咲いたのはただの人間同士の純粋な友情に過ぎません。

沖縄の珊瑚畑見学に行った時、そこのスタッフさんが言った一言は今も私の耳元に響いています。「皆さんが住んでいるところに珊瑚がなくても、帰国後珊瑚の重要性を周りの人を教えてほしい。」私はこれから、珊瑚が海にどんなに重要な役割を果たすのかだけでなく、自分が見た美しい日本、感じた日本人の優しさ、等身大の日本をも周りの人に伝えていきたいと思っています。微力ながら、自分の話で日本に興味を持ちはじめ、日本へのイメージを変える人が一人でも増えていければと思っています。交流の輪が私たちから広がっていくと私の目の前にこんな未来図が描かれています。

最後ですが、今回、ずっと付き合ってくれた日本科学協会の宮内先生、顧先生、孔先生、人民中国の王先生、陳先生、上海交通大学の呉先生、陳先生、そして温かく迎えてくれた笹川学生実行委員会の学生の皆さん、そして津覇さん、津覇さんのお母さんをはじめにする関係者の方々に、感謝の意を表したいと思っています。本当にありがとうございました。（原文日本語）

華東政法大学日本語学科 3 年 姚 子茜



日本から帰った直後、私は病気にかかって、三日間くらいベッドに寝込んでいたのだ。

インフルエンザでした。

「これも日本から持ってきたお土産なんかじゃないかな」って、私は心配している家族と冗談を言っていた。

病気で寝るしかない、この三日間。気持ちの整理はできた。思い出の整理も、なんとなく。

まるで子供のように、私たちは打ち寄せる波に連れられた小さいかにを追いかけていた。それは沖縄の海辺だった。

朝早く起きて、「寒い寒い」と言いながら、暖かい日差しに粉雪が舞い降りているのを見て喜んでた。それは日が昇ったばかりの比叡山だった。

体調が崩れていたため、情けない私は町で涙をこぼした。あの時に友達がそばにいてよかった。繋いだ手も、励ましの言葉も、あたたかかった。それは夜十時過ぎの心斎橋だった。

頭の中でメリーゴーランドのようにぐるぐる回っていたのは、忘れられない訪日エピソード。

正直、出発する前のその夜、くよくよして荷物を確認している私は母にこう言ったのだ。

「7 日って長すぎ—と思わない？友達と行けばいいのに、ね。」

あの時の私には、まだ気づいていないことがあるだろう。

友達は自分の好みに合わせて、勝手に「作る」ものではなくて、無数の出会いによって繋がる人々だということ。(原文日本語)

華中科技大学日本語学科 3 年 許 逸菲



幸運の旅、収穫の旅、成長の旅

今年の 2 月 28 日、東京の成田空港に着いた時、私は胸がドキドキしていました。この旅を楽しみにしていたが、友達を作ることができるかとか、自分の日本語会話は大丈夫かとか、やはり色々な心配事がありました。しかし、笹川杯訪日団のみなさんはすぐに、私の不安を一掃しました。一週間は短いですが、一生の思い出だと思います。感想をまとめると、この旅を幸運の旅、収穫の旅、成長の旅と呼びたいです。

まずは幸運の旅です。「優しい人なら、雨も晴れになりますよ。」と顧先生が言いました。訪日団のみなさんはこの話を証明しました。東京での二日目、朝は大雨で、風も強かったので、ガイドさんに皇居への計画もキャンセルと言われて、失望しました。驚いたのは、出かけた 10 分ぐらい、黒雲は消えて、日が出ました。同じことは沖縄でも起こりました。いい天気のおかげで、日本を思う存分に楽しむことができました。それに、東京はまだ寒くて、桜が咲いていないはずだが、お台場で満開になった桜を見ました。夕日

と伴って、薄紅の花は非常に美しかったです。最後は京都の伏見稲荷大社で、おみくじを引いて、向大吉でした。この旅はほんとうにラッキーだと思っています。

次は収穫の旅です。私は日本に長期留学の経験がなくて、会話力はそんなに強くないが、日本人のボランティアたちは真面目に手引きをして、日本のこといろいろ教えてくれました。彼たちのおかげで、日本語をマスターする自信もわいてきました。そして、国会議事堂、ひめゆり平和祈念館、珊瑚田などは、観光地だけではなくて、いい勉強になりました。特にひめゆり平和祈念館で、戦争の残酷を感じて、平和の珍しさを気づきました。私にとって、この旅に一番嬉しかったのは、日本人のボランティアたちと友達になって、訪日団の皆さんとも、仲良くなりました。それに、インターネットのおかげで、WeChatで連絡することが簡単で、また会うチャンスもあると信じています。

最後は成長の旅です。訪日団の孔先生は毎日同時通訳を担当して、彼女のような優秀な通訳者になるために、もっともっと頑張らなくてはなりません。帰国した後は、孔先生を目標として、日本語を勉強しようと思います。また、先生たちが教えてくださったマナーも、しっかり覚えています。訪日団の皆さんは何時に起きても、一回も遅刻しませんでした。どこに行っても、忘れ物をしませんでした。礼儀正しい友達と一緒に旅行して、自分に対する要求も厳しくなりました。

要するに、この旅は楽しさに満ちて、忘れがたいです。笹川杯訪日団の皆さん、誠にありがとうございました！（原文日本語）

吉林華橋外国語学院双語学院 英日学科5年 肖 姍夢



マイナス 20 度近くの長春の雪道を冷たい風に吹かれながら歩いていると、思わず沖縄の砂浜を素足で歩いたことを頭に浮かんできて、日本にいる八日間はまるで夢のように感じました。

三年生のときに、一年間日本に留学したことがありました。それでも今回の旅行にすごく新鮮感が沸き、期待していました。なぜなら、これまでの日本旅行はほとんど一人旅で、旅行の楽しみも景色や食事を楽しむことに過ぎないからです。ですから、今回のような全国の各地からの学生と一緒に旅をし、日本の文化を体験し、そして、歴史施設の現地見学することに大変楽しみにしていました。

初日の歓迎会のお店は玄品フグという店は、ちょうど日本留学中にバイトしていたお店です。同じ新橋の関ではないが、提供される料理はまったく同じで、店の雰囲気もたいして変わりません。透き通るほど薄造りできらきらしていて、お皿に扇子の形のように盛られたてっさを見て、一年ぶりに店のフグを味わえ、店でバイトしていたときのことを思い出し、懐かしい気持ちでいっぱいでした。

東京での思い出の中に、一番印象に残ったのはやはり日本人学生との討論会でした。それまでは学校の日本人の留学生とよくコミュニケーションを取っているが、ただの日常のお

しゃべりすぎません。今回のような正式的な場で、中日両国の魅力を巡って、日本人大学生と意見の交し合いをするのが始めてでした。日本人の目線から見た中国の観光魅力、自分が外国人として知った日本の観光魅力などについて話し合い、外国人しか気づかないお互いの国の魅力を知ることができて、実に面白かったです。

今回の旅で一番楽しんでいたのは沖縄の二日間でした。沖縄に着いた時は雨が降っていたので海景色が楽しめないではないかと心配したが、幸いなことにホテルへ向かう途中には晴れに変わりました。実は、おととしのゴールデンウェークに沖縄に来たことがあり、当時訪れたのは沖縄本島から離れた八重山諸島でした。それもまた言葉では表せないほど、心と目を奪われる美しい景色。そして、今回再び海を見て、「何度でも来たい!もっと長期滞在したい!」と思いました。特にどんな言葉をも超越するような美しさを持つ、きれいな白い砂浜、南国らしいエメラルド色をしている海を思う存分堪能できて最高でした。

同じ旅行先でも、違う人と行けば違う景色が楽しめます。今回の旅を通じて、日本の社会や文化を更なる理解を深めることができたほか、すごく優秀なみんなと知り合い、忘れがたき思い出をたくさん作ることができました。ごく短い八日間でしたが、何年も知り合っているように感じました。本当に楽しかったです。

最後に、日本科学協会と日本財団の皆様にご感謝の意を申し上げたいと思います。このような体験をさせていただいて、誠にありがとうございました。朝から晩までびっしりと詰まっていたスケジュールでしたが、大変楽しく、且つ有意義な八日間を過ごすことができました。(原文日本語)

★「“本を味わい日本を知る” 作文コンクール」 訪日団

華東師範大学 伝播学院2年 施 柯沁



春爛漫季節の温かい出会い

今回の短い日本の旅をどのように形容すればよいかをずっと考えていたすえ、頭から「温度感」という言葉が飛び出された。東京から沖縄、大阪へ、春と夏の二つの季節を経験した(笑)が旅で出会った人々の温かさが大事だと思った。

日本は非常に繊細な国だ。朝、出かけると、警備員、店の店員、歩行者等見ず知らずの人々が「こんにちは」とあいさつする。……公共トイレにトイレットペーパーやハンドソープが備えられている。信号が変わると、道路を走っている車がとまり、歩行者を優先に渡らせる。信号の下に押しボタンが備えつけられ、歩行者が押すと優先に道路を渡ることができる…これらの日常生活とサービスから暖かい思いやりを感じられる。沖縄にいた時、神話中の2匹の獅子犬が地元のマスコットとなり、まじめでかわいいイメージを与え、車に、道のそばに置かれ、島国の日常生活にすっかり融けこみられ、この島の一員となった。この島国の

人々が現代化への過程でどのように忍耐力と活力で自らの習慣を保ち、自らの文化を保ってきたかを考えて驚きを感じた。外在の景色と繊細さから人間性の濃さが生まれ、物質社会の発展の背後に精神的側面が覗かれる。

この旅で一番幸運なことは温かい人との出会いだった。

訪日団のみなさんは中国全国各地から来たが何とも言えないご縁で短い一週間で代えがたい友情を結んだ。訪日団に数少ない日本語がしゃべれない1人として、最初から最後まで皆様にお世話になった。精緻な料理、居心地の良いホテル、さまざまな観光……先生達の辛労があったからこそわれわれの旅は順調に運ばれた。バスの中で先生達はいつも次の行程について相談していた。言葉に出ないこれらの思いやりがみなさんの楽しい旅を支えた。孔先生の同時通訳は私たちの旅を伴った。同時通訳は非常に精力かかる仕事だが先生が苦労を問わずにすべての人が良い文化体験ができるように毎回毎回通訳してくれた。仲間たちも討論会や交流の中で不器用な私のために通訳してくれた。東京、銀座……たとえ、人込みに吞まれる町で歩いてもみなさんについていけばなんとなく表現できない安心感に支えられた。

今回の旅で人生に数少ない外国の友達を作った。東京の中島さんは魯迅文学の研究者で中国の屋台料理、中国の学校生活に興味を持っている。沖縄の愛さんも照れくさいに自分の恋愛物語を語ってくれた。彼女も現在の中国の若者が何が好きなのかについて関心を持っていた。中国人の母親を持つゆうやさんは日本と中国の若者の交流に熱心に活動している。夕食会終了後にぜひ中国（日本）であおうと約束を交わした……

出会った時のうれしさ、別れた時の辛さ、絆の確かさ、さまざまな経験に含まれた思いやり、初めての日本ではあるが春にふさわしい温かさが残った。出会いに感謝し、再会を期待する。（原文日本語）

上海交通大学安泰経済と管理学院2年 邱 舒怡



老人の都市

わたしは東京に三日間滞在した。その三日間で何が「老いるということ」なのか、また何をもって「都市」とするのかが分かった気がしたので、この文の表題を『老人と都市』と名付けて、東京という都市がわたしに与えた二つの概念「老いるということ」「都市」について書こうと考えた。

日本はまさに老いている国であり、その高齢化は世界でも有名で、65歳以上の老人の数は全人口の26%を超えている。中国の60歳定年制に換算すれば、二人の若者が一人の老人を養っているということになる。しかし急速な高齢化は必ずしも労働力の構成の変化にはつながってはいない。それは終身雇用制のもたらす作用もあり、家族経営の個人商店が多いということとも関係があるだろう。老人の失業率が高くないということは、ますます老人が

元の職場で頑張って仕事をしているということである。

東京でわたしたちのためにバスを運転してくれた男性の頭髪は真っ白であったが、依然自分の仕事に従事しており、清潔な制服に白い手袋でバスのトランクに潜り込んでわれわれのスーツケースを格納してくれた。東京の町を歩けば多くの老人が正装をして鞆を携え、さっそうと歩いてビルの中へ消えていくのを見ることができる。彼らは高齢のサラリーマンであるが誰も高齢ゆえの恩恵を得ようなどとは考えておらず、仕事では若者と同じように仕事上の責任を果たす職業人なのである。周囲も特別老人扱いするわけではなく、普通の人の同じように尊重して平等な態度で接するのである。

東京で地下鉄に乗ってわたしが感慨深く思ったのは、車両ごとに優先席が設けられているが、それは中国国内と違うわけではないのだが、わたしがそこに見たのは疲れたサラリーマンや若者たちが混み合った車両の中でもあえて優先席には座らず、老人のために開けてあることであった。そのほかこの町では細やかな親切を見つけることができる。たとえば押しボタン信号のボタンの位置が車いすの人にも押せるように低い位置についているとか、エレベーターのボタンにも盲人用の点字ボタンがあるとかである。

ここで突然思い当たったのが2010年の上海万博のときのテーマ「ベターシティ・ベターライフ」である。都市はその収容力・成長力で人類の集落としてのハイレベルの存在方式であり、健康で若ければどこにでも適応できるのだから、かつて若く今は年老いた人たちに都市がしてあげなければならないことは実はとても多い。「老いること」を恐れる必要はない。というのも真の意味でも現代都市は高度な包容力で老人を若者と同じように平等に扱うことができ、生活の不便は先進設備によって補い、老人が普通の人と同じように自由に行動することができる。東京はまさに高齢化社会への過程を経て、都市自身もまた老練な都市へと変化しようとしており、それがまた違った可能性を彼女に与えている。(原文日本語)

自活できる人は尊重し、援助が必要な人には救いの手をさしのべる、それは都市の責任であることにとどまらずひとつの都市の包容力と度量であるといえる。(訳：潘東晨)

北京大学对外漢語教育学院博士1年 崔 言



日本もはじめてでなく、日本若者との交流もはじめてではないが、今回の訪日で中国にあこがれを持っている日本本土の若者とははじめて対面した。若者交流会のテーマは、“伝えたい魅力、知りたい魅力、日中再発見”だったが、その中に“伝えたい(想要传达)”“知りたい(想要知道)”に含まれる強い意欲、光と色は文字の形を破ってどっとよせてきた。

かれらは真剣に中国語の発音と文字を勉強したい、中国の公共交通システムを知りたい、各地方の美食を食べたい、中国の南北それぞれの風貌を感受したいと考えている。その中に中国旅行に関する詳細な計画を立てた人もいる。それに対して中国各大学からの仲間たち

は訪日の見聞を語り、得意満面で笑顔でいっぱいだ。対外漢語教育を専攻する学生としてこのような場面に触れて親しさとうれしさでいっぱい。言葉という架け橋は、華麗で透き通っている、柔軟で牢固である。耳に入って綺麗に聞こえ、手で触って温かさを感じる。この架け橋は万里に渡っても微塵も立たない。

日本社会の高齢化のせいか、私の日本人の旧交には 60 歳以上の人が多い。かれらは日本の若者が自分の世界に埋もれ、他国や他国の分野に無関心だと思い込んでいた。しかし、今回私が日本の若者と交流したことを皆様に伝えたら思いがけないことで嬉しく思われ、両国ないし世界の文化及び未来に期待できるようになった。どこであろう、いつであろうが旅行には旧友との再会、新しい友人との出会いが一番うれしい。その場面、その友情、忘れたくない。(原文中国語)

東北大学秦皇島分校語学学院 3 年 劉 穎慧



日本の“繊細”

2018 年 2 月 28 日、あこがれていた日本の国土に足を踏み入れた。まるで夢のようだった。

日本という国は、本の中から読んだことがある、テレビや映画から見たこともある、夢の中で見たことがあった。この国にまつわる美しい物語がたくさんあったにも関わらず、私にとって蜃気楼のように目の前にあるように見えるが触れることができない存在だった。散在していた不完全なイメージを集め、自分が正しいと思う部分を抽出して理想な模様に編みあげることしかできなかった。しかし、紙上の空論は何も役に立たない。自の目で日本を見ることは本当の意味においてこの国を知ることだ。

1 週間に 4 都市を回った。中国大陸と海を隔てた日本の国土を歩きまわった。この国の縦軸の歴史、この国の横軸の風土人情を深く知ることができた。パイプの中から豹を見ると「一斑」しか見えないが日本のことを「繊細」との 2 文字に尽きる。日本の繊細は細かいところから感受でき、桜のように静かに精巧にしなやかに咲き乱れ、おさまりよく、武士のたましいのように見える。

日本の新奇はまた「可急可徐（緊張感と落ち着きがあり）、有张有弛（張ることも緩めることもできる）、能收能放（収めることも放すこともできる）」といえる。

東京では、林立される高いビルの中に急ぎ足で歩いている人たち、夜、万家灯火、道路に車の列、東京という国際大都会の早いリズムを感じる。緊張感、ストレス、努力…これらの文字は東京の空気に混ざっている。この東京の空気においてその流れに乗り、奮い立たせる衝動がある。国土の狭い日本は都市間の地域差が明らかにわかる。

遠方の島国沖縄ではまた別のリズムを感じた。沖縄は静かな町でリズムが遅い。東京に比べて町に人影が少ない。沖縄市民をうらやましく思った。毎朝、サンシャインを浴びて起き、

波の音で眠りに入る。沖縄市民は島国の優しさと熱烈さがある。全然知らない人に対して「おはようございます」とあいさつする。思わず人生の暮れに世間のすべてを捨てて外の世界とは時間的断層のあるこの島で余生を送ることは悪くない選択かもと、思った。

京都ではまた別の驚きとうれしさがあった。。比叡山延暦寺の古道をぶらぶらすると、深山の禅寺、古木、石畳みの苔、京都の長い長い歳月を目に前にあった。歴史はこの町で蓄積し、沈殿していく。京都の趣を感じる。生活はもともとそうすべきではないか。浮わつく世の中から離れて木魚の音に耳を傾く、青灯古佛に導かれて千本鳥居の前で佇む。いつになっても京都の諸佛を敬畏する。日本の万千信徒から作られた信仰を敬畏する。その信仰は強い心に化す。

「一花一葉，一湯一粟」から日本の繊細さが味わえる。多くは言いたくないがまたいつの日かこの繊細さを再び味わい、現実の煩雑から逃げる。日本は近い。しかし逃げられる場所はいくら近くても旅人にとっては天涯である。

その日に、“ただいま”というだろう。しかし、その時、期待していた“お帰りなさい”があるだろうか？（原文中国語）

★「笹川杯作文コンクール」訪日団

広東外語外貿大学日本語学科3年 黄俊捷



優しさの走るこの国に

「どうだったの？」

「何が？」

「日本での一週間旅行だよ！」

「あっ、そっちか！楽しかったよ！」

「それだけ？」

「そうだよ。」

「もっと話して欲しいさ。マクロじゃなくて、具体的な例を挙げて！」

「へえー、急に言われても。」

旅行から家に帰るたびに、いつもこういうふうに母に感想を聞かれます。今度も例外なくそうです。

「東京をはじめ色々なところを訪れたり、美味しいものを食べたり、日本の友達もできたりして楽しかったよ！」

「もっと喋って！」

いつも楽しいと言っただけでごまかしてきたが、もう通用しなくなりそうです。

「あのね、私達にめったに食べられないものを食べさせて、めったに行くことのないところに観光させて、先生達も色々なところに心を尽くした。タイトなスケジュールとなったけれども、毎日充実して送ってきた。」

。。。。

母に誘われて、この一週間で出会った人と面白いエピソードもどんどん湧き出してきました。短い一週間の中で、日本の方々はいつも笑顔で私達を暖かく接してくれました。特に、ボランティアとして、私達を東京都内を案内してくれた日本の大学生達は、多様な観光コースを考えてくれたり、私達の気持ちを構ってくれたりしました。彼らの姿を見て、

私は本当に心を打たれて、日本人らしいのおもてなしを感じました。それに、そのおもてなしは今度また別の形で私達の目の前で現れました。それは、私は秋葉原の街を歩いていた時にある標語を見かけた時のことです。「優しさの走るこの街に」——ただの10文字ですが、とても迫力があると思います。何故かと言うと、街は人が集まる場所なのです。優しさの溢れる街というのは、優しい人の溢れる街です。「人があつての街、街があつての国。」もし、皆はそれを目指して、同じ方向に動くなれば、近いうちに日本も優しさの走る国になることができるでしょう！ごく日常的なものこそ、国のイメージアップの責任を持っています。だから、私は改めて日本人の繊細さに驚きました。

総じて、この一週間旅行のおかげで、私は色々な人と出会って、沢山の思い出を作りました。そして、横で彼らをじっと見ていて、私もすごく勉強になりました。これからも、学校にとどまらず、社会に出て、私は一期一会をモットーに相手を丁寧に扱います。

(原文日本語)

青島大学大学院1年 潘 東晨



全国各大学からの皆さんと一緒に日本を訪ねることができて、今思えばまるで夢のように不思議でした。しかし、旅で出逢えた人たち、見かけた風景、すべて夢ではなく、一つ一つ心に刻んでおります。日本に来たその日、特別な友達に招待されました。彼は二年前から SNS で私に中国語を教わっている日本人です。もし相手が自分の国に来たら、きっと招待するとお互いに約束しましたが、いつか本当に会えるなんて思えませんでした。その日、おいしいものをご馳走したり、日本についていろいろ面白いことを教えたりして、本当に楽しかったです。帰る途中、雨が急に降って来ました。しとしと降っている霧雨、静かな夜の町、目の前の光景から一首の和歌を思い浮かべてきました。「鳴神の 少しとよみて さし曇り 雨も降らんか 君を留めん」。ああ、そういう気持ちだなんて私やっと分かりました。雨がやまなくていい、もっと一緒にいたいから時間をこの瞬間で止めてほしいという気持ちなのではないのでしょうか。出会いの喜びと別れの悲しみが入り交じって、強い絆となっています。この絆があればこそ、私たちまたいつかきっと会えると信じております。(原文日本語)

海南師範大学日本語学科4年 柏 毅洋



研修旅行を終えて—サン・キュー—

2018年春、笹川杯訪日団の皆さんと一緒に旅行したことがとても貴重な思い出になりました。今回は単純な旅行ではありません、文化の体験だと考えます。みんなと一緒に交流したことで、いろんな方面の日本文化の魅力を発見できました、わたし本当に嬉しかったです。

「日本若者の魅力」

東京での日中両国の若者討論会が一番よく勉強できたの活動だったと思います。訪日団の皆さん、そして日本の大学生たちと一緒に日中互いの魅力を再発見し、いい関係を築くためには自分たちが「何をすべきか。」を討論しました。私たちのグループは、日中文化というテーマを選びました、「食文化」を例にして、日本の食品の安全性、食材の自然性、お菓子の見た目などのいろいろな魅力を述べました。それから中華料理の魅力を伝えました。近年中国本土の飲食店が日本で次々にオープンしました。たとえば四川カイテイロウ火鍋、マーズルー牛肉メンなど、これは日中民間友好交流に大きな役割を果たしていると考えます。また、討論の中で、グループの日本人女子大生二人の主張は私にすばらしいインスピレーションを与えました。彼女らによってわたしは伝統芸能や伝統服装など多種多様な日本文化を学ぶことができました。討論会が終わりましたと、日本の大学生と一緒に浅草寺や東京スカイツリー観光に行きました。

「和食の魅力」

今回はたくさん本番の日本料理を食べました。フグ門店でふぐ刺し、ふぐ酒、とふぐ鍋を食べました。生ものを食べられない自分にとって、フグの刺身は大きな挑戦だと思いますけど、勇気を出して食べてみました、美味しかったと意外な発見しました。また、浅草で近くの大黒屋さんの天井とか、延暦寺で綺麗な見た目のある精進料理とか、しゃぶしゃぶとか、和食の魅力を感じました。

「見物の魅力」

沖縄では、琉球芸術パフォーマンスを見ました、本当に素晴らしいと思います。美しい海を見ました、とても楽しかったです。サンゴ畑の見学した時、さまざまなサンゴを見ました、サンゴはだいたい二種類に分けられます、硬いサンゴと柔らかいサンゴです。サンゴの魅力は見た目だけではありません、巨大な生態作用もあります、海底で四分の一の生物はサンゴに頼って生きていますが、全世界でサンゴの面積が海洋面積の0.2パーセントを占めています。したがって、サンゴの守ることが非常に大切だと思います。

最後に、今回はずっと私たちに解説してくれました孔先生と他の先生に感謝しています、皆さんがいてこそ、こんな素晴らしい旅行体験ができました。楽しい時間はいつもすぐに過ぎました、しかし、皆さんと一期一会の出会いが永遠に残っています。皆さん、誠にありがとうございます、いつかまた会おう！（原文日本語）

華東師範大学 日本語学科 4年 湯 依姫



七泊八日の笹川杯研修旅行があっという間に終わりました。ハードなスケジュールだった日本から帰国してホッとしているうちに、カレンダーをめくって3月9日になりました。「サン(3)キュー(9)」の語呂合わせを借りて、訪日団の皆への感謝を伝えたいと思います。

日本人にとって、3月は卒業シーズンであり、別れもあれば新たな出会いもある季節で

もあります。笹川杯訪日団のみんなはそのまだまだ肌寒い春に出会って、そしてそれぞれの明日へ旅立ちます。レミオロメンの名曲『3月9日』を繰り返し聴くと、研修旅行の八日間が目に浮かんできて、自然と涙が溢れてきました。

そういえば、笹川杯とは深いご縁があります。笹川杯作文コンクールに個人で応募し、同級生の二人と組んで笹川杯日本知識大会にも出ました。結果として、作文コンクールで優勝し、研修旅行に招待されたものの、一人ぽっちで知り合いがいないため、かなり悩んでいました。

しかし、中日大学生たちから、訪日団の主催者である日本科学協会の方々までみんな優しく、親切に話しかけてくれたり、時々ふざけてからかってきてくれたりしたことで、どんなに天候が悪くても、早起きがどんなに辛くても、みんなの笑顔を見ると「まだまだ頑張れる！明日、楽しみだな～」と心の底から思えます。

今回の研修旅行は「優しい人、綺麗な景色と考えさせられるストーリー」という三拍子揃った最高の旅でした。沖縄で「ひめゆり」の戦争体験を聞いてから見た青い海と空は凜と澄んで、生きることの喜びと重みを感じました。もっともっと広い世界に生きているすべての人が幸せだと感じられるように、ほんの一瞬でもいいですから、そう願いたいです。延暦寺の座禅体験は同じく「生きる」と「自分」への問いです。自分のことを知らなければ、相手のことは勿論分からないし、何を得ても幸せになれないと思うのです。「自分探し」から「自分づくり」への貴重な時間を設けてくれたことに感謝します。

本当に短い期間でしたが、この研修旅行を通して人と人の心の交流と平和の大切さを学びました。流れる季節の真ん中で、見てきた景色、歩んできた道はすべて未来に繋がり、3月の風に想いをのせて歩んでいく道の先に続きます。言葉では伝えきれない感謝の思いは、『3月9日』という楽曲を通してすでに伝えてくれていると思います。ありがとうございました。（原文日本語）